

国際看護—
外国人への看護に対する
学生意識のIntervention Study

著者:米山 真未, 西川 まり子 准教授
所属:広島国際大学看護学部看護学科
(西川ゼミ)

内容

I. はじめに

II. 研究方法

III. 結果と考察

IV. 結論

V. 引用文献

I. はじめに

1. 背景
2. 目的

I はじめに

1. 背景

- ◎ 法務省入国管理局の調べによると、平成22年度の外国人入国者数は、944万3696人、外国人登録者数は、213万4151人で、どちらも増加傾向にある。日本の総人口に占める日本国住者の外国人登録者の割合は、1.67%となっている。
- ◎ 文部科学省は、留学生数のさらなる拡大と支援のために2008年に「留学生30万人計画」を打ち出し、2020年までに留学生受け入れ数を30万人にまで増やすことを目標としている。
- ◎ 国土交通省では訪日外国人数を将来的には3000万人をめざす事を目標とし、「観光庁」の新設が実現すれば、「観光立国」として訪日外国人を2030年に4000万人に増やす計画をしている。

- ◎ 経済連携協定(EPA)に基づき平成20年度からインドネシア, 平成21年度からフィリピンからと, 外国人看護師・介護福祉士候補者(以下外国人候補者)の受入れを実施してきている。



これらのことから

人々の活動は国境を越えてさらに拡大していくと考えられる。このことから, 外国人の医療機関の利用率も増加し, 外国人に対して看護を行う機会が増えてくると推測される。

2.目的

既存の研究では、外国人の患者に対する医療・看護のあり方について看護学生に対し意識調査を行った研究は稀少である。

- ・国際看護実習を履修する看護学生の外国人患者への看護に対する意識と実習前後での意識変化
- ・実習を行うことによる影響



明らかにする

国際看護学の教育が重視され、
今後の外国人患者への看護に役立てる。

II. 研究方法

調查對象

調查期間

調查方法

分析方法

倫理的配慮

II 研究方法

◎ 調査対象

- ・H大学看護学部看護学科の国際看護論実習履修者32名のうち、実習前後共に有効回答であった25名。
- ・性別:男子学生5名(20%),女子学生20名(80%)
- ・年齢:21歳~33歳(中央値21.6歳)

項目	n	(%)
異文化交流の経験		
あり	13	(54)
なし	11	(46)
異文化コミュニケーション論履修		
あり	20	(80)
なし	5	(20)
実習病院		
A病院	11	(44)
B病院	14	(56)
外国人患者・看護師と関わる機会		
あり	23	(92)
なし	2	(8)

◎ 調査期間

- ・質問紙調査期間:2012年4月28日~8月24日
- ・研究期間:2012年4月1日~10月23日

◎ 調査方法

- ・調査は自記式質問紙で行った。質問紙は文献を参考にした。(長谷川ら, 2002)
- ・外国人患者にケアを行う際の考えを述べる自由記述を加えた。

外国人患者を将来受け持つと仮定した際の
必要なことについての考えを分析した。

◎ 分析方法

- ・選択式:統計ソフトJMP10.0, Microsoft Excel
- ・自由記述:Text Mining Studio 4.1

係り受け頻度, ことばネットワーク分析

◎ 倫理的配慮

無記名で回収ボックスへ提出により個人が特定されないこと, 成績には何ら関与しないこと, 本研究にのみ使うことを説明し, 質問調査への回答は自由であることを伝えた。なお, 参加の意思は質問紙調査用紙の提出をもって同意を得たものとした。

Ⅲ. 結果と考察

1. 外国人患者の将来の受け持ち希望
2. 外国人患者への看護をする際の不安
3. 外国人患者への看護をする際の注意
4. 外国人患者の看護に必要なこと

Ⅲ 結果

1.外国人患者の将来の受け持ち希望の有無

◎結果

	外国人患者の受け持ちの希望				n=25
	実習前		実習後		
	n	(%)	n	(%)	
受け持ちの希望					
あり	14	(56)	22	(88)	
なし	11	(44)	3	(12)	

- ・実習前に比べて実習後には受け持ちを希望する者が増加していた。
- ・実習前に比べて実習後には範囲が50～100%と大幅に変化し、20～49%を回答した人がいなくなっていた。

1-2. 外国人患者の受け持ち希望の理由について TextMining Studio4.0.1を用いての分析

- ◎ 実習前後で自由記述による質問内容。
「外国人患者の受け持ち希望の理由」
実習前後とも全員が回答。
- ◎ 外国人患者の受け持ち理由を本研究では、係り受け頻度分析を行った。

◎ 外国人患者の受け持ち希望の理由: 総文章の基本情報

実習前

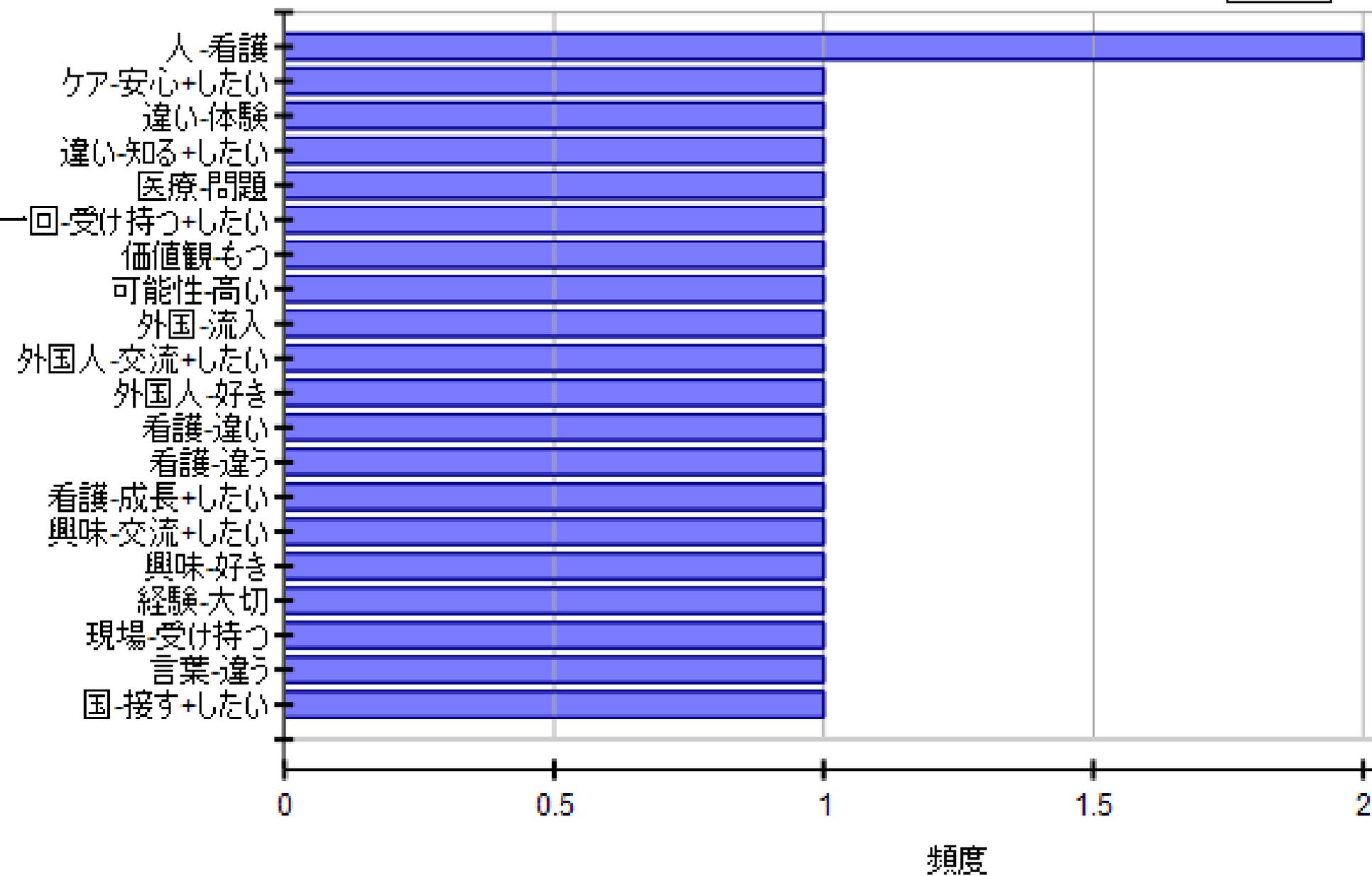
項目	値
総文数	29
平均行長(文字数)	12.8
平均文長	11
述べ単語数	127
単語種別数	86

実習後

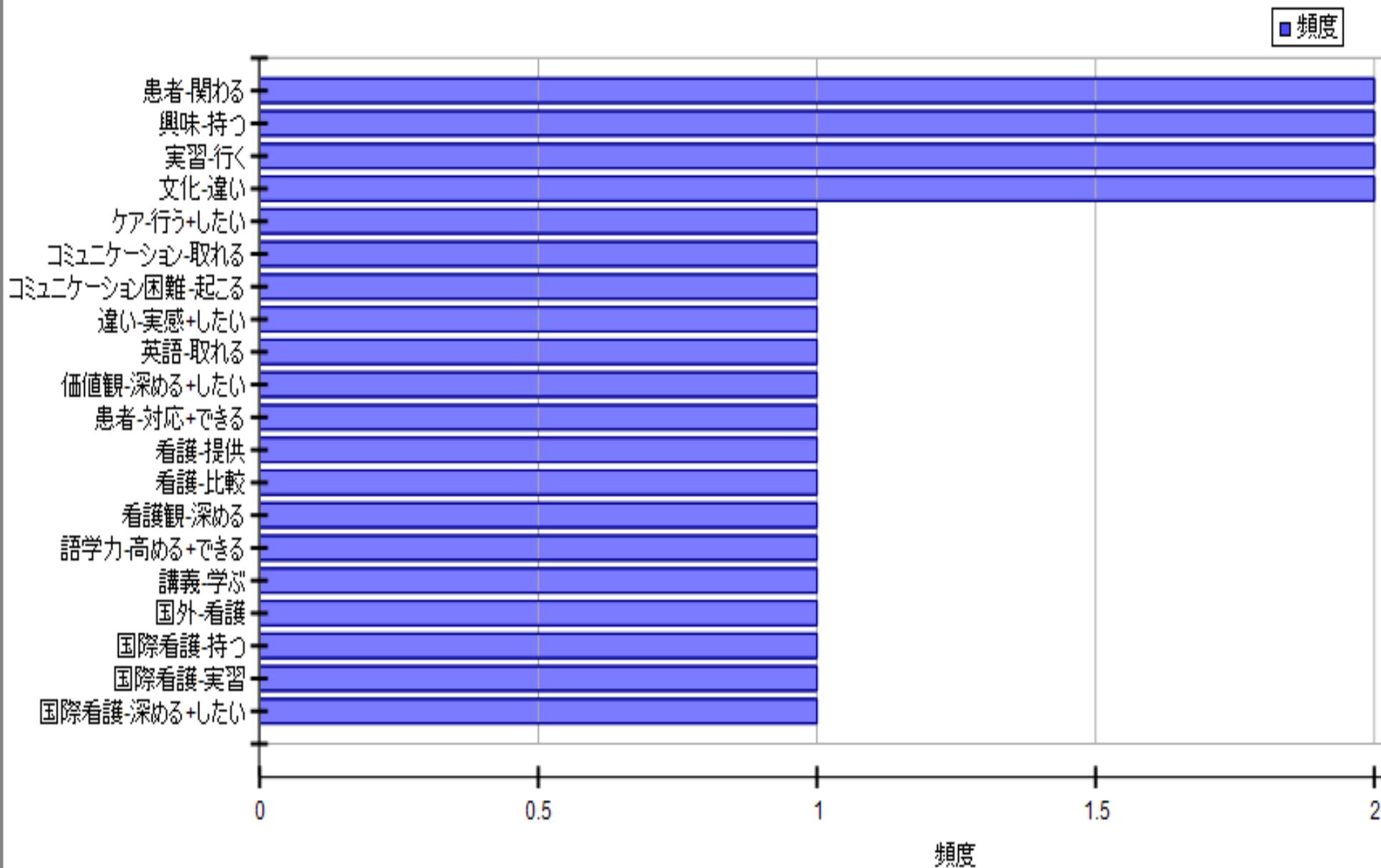
項目	値
総文数	31
平均行長(文字数)	14.1
平均文長	11.4
述べ単語数	135
単語種別数	89

外国人患者の受け持ち希望の理由の係り受け分析:実習前

■ 頻度



外国人患者の受け持ち希望の理由の係り受け分析:実習後



◎ 結果

実習前後とも共通して3つのことがみられた。

- ①外国人患者への関心
- ②日本人患者との違いへの興味
- ③自分自身の変化や成長



実習後には

- ・ ③に関して実習前より **具体的な内容**となっていた。
- ・ 「実習-行う」「国際看護-実習」などの**実習自体の**ことが新たに示されていた。

◎ 考察

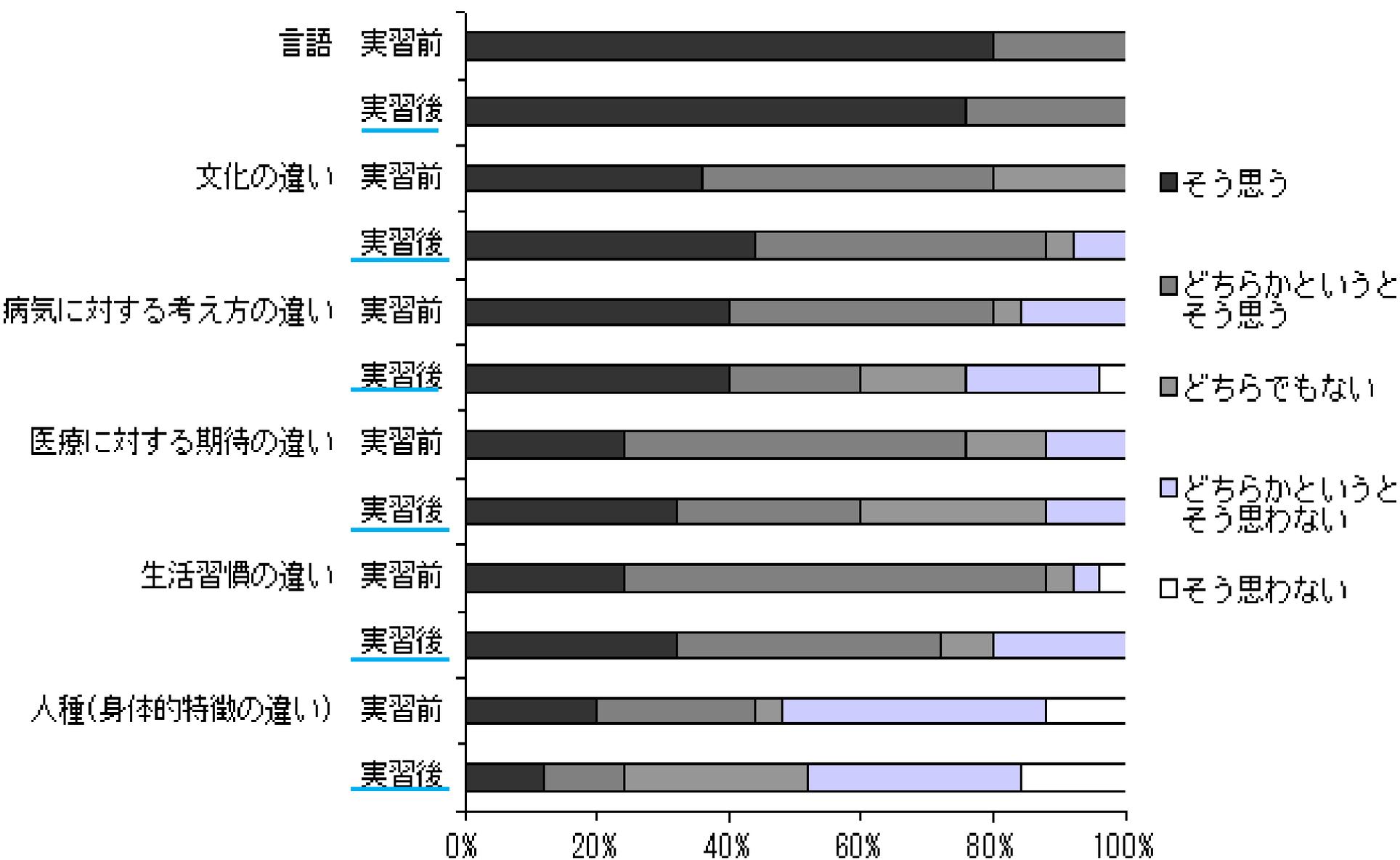
・受け持ち希望が実習後に増加していたこと、受け持ちの理由として実習後には実習自体についても述べられていたことから、実習で経験したことが受け持ちの希望に関連しており、受け持ちの希望をすることにつながるということが明らかになった。



実習の中で、日本人と変わりなく当たり前毎日ケアを行っている看護師の姿を目の当たりにしたことで、学生の受け持ちしてみたいという意識へつながったと推測される。実際に実習といった外国人患者との関わりの持つ経験が重要であると考えられる。

2.外国人患者への看護をする際の不安

n=25



◎結果

学生の考える外国人患者の看護をする際の不安では
実習前後とも「言語」について学生の意識が最も高い
ことが明らかになった。



実習後には

「文化の違い」、「生活習慣の違い」、「医療に対する期待の違い」について不安を感じるようになっていたことが明らかになった。

◎ 考察

- ・学生の考える外国人患者の看護をする際の不安では実習前後とも「言語」について学生の意識が最も高いことが明らかになり、言葉の壁を感じていると示唆された。
 - ・実習後には変化として文化の違いについて不安を感じるようになっていたことが明らかになった。
- ⇒異文化に関する授業を履修していない学生もあり、異文化について知らないまま外国人患者と関わったことで不安が高まったとも推測される。

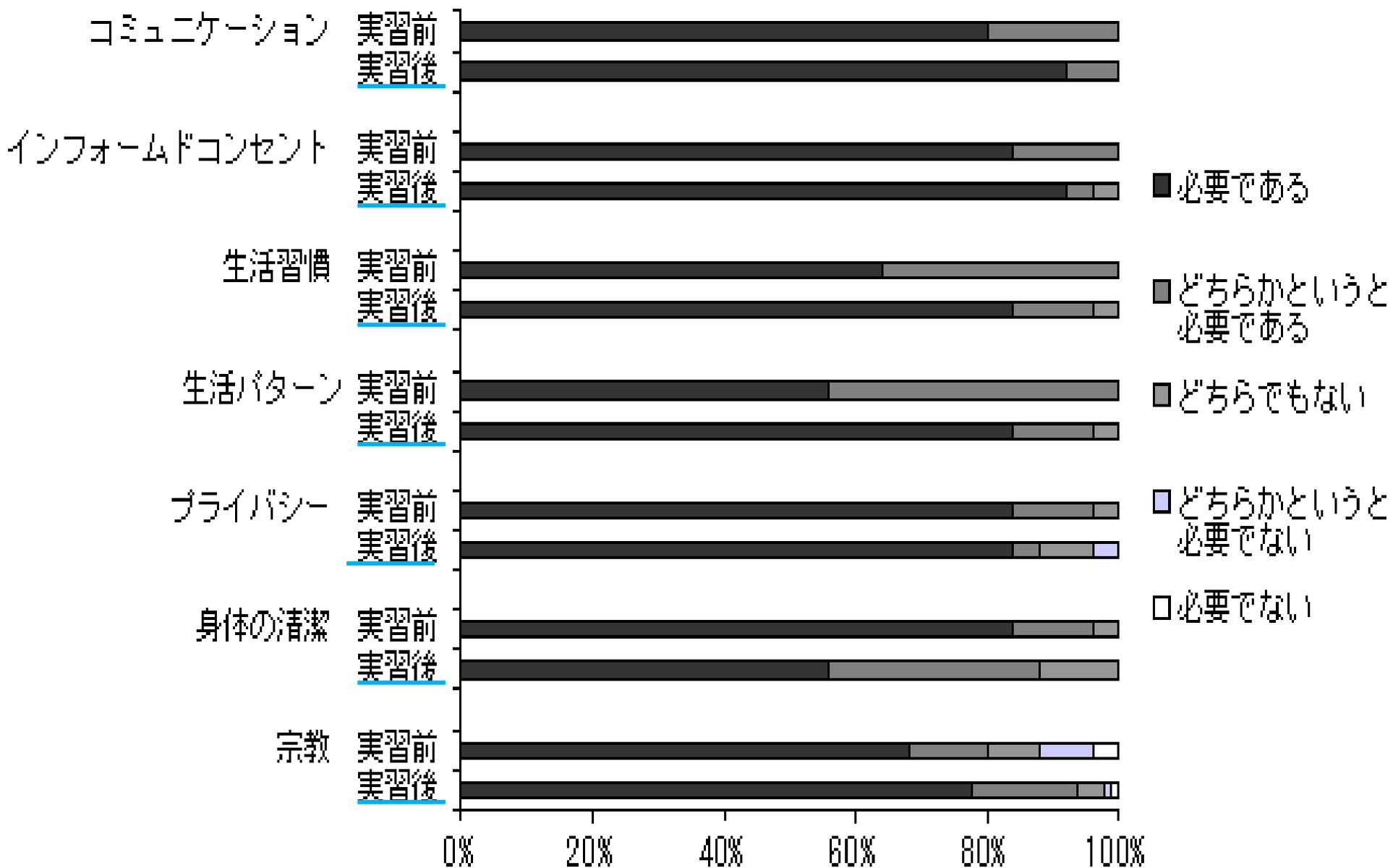


実習中に外国人患者から直接日本と自分の国の違いについて話を聞くことができたことや、看護師などから歴史的背景について話を聞くことができたことなどが関連していると推測される。

このことから、異文化について知る機会や実際に触れることのできる機会を持つことが必要であると考える。

3.外国人患者への看護をする際の注意

n=25



◎結果

学生の考える外国人患者への看護をする際に注意することとして、**実習前後**で「**コミュニケーション**」と「**インフォームドコンセント**」について学生の意識が最も高いことが明らかになった。



実習後には

「**生活習慣**」, 「**生活パターン**」, 「**宗教**」が必要だと考えるようになっていることが明らかになった。

◎ 考察

・学生の考える外国人患者への看護をする際に注意することとして、実習前後とも「コミュニケーション」と「インフォームドコンセント」について学生の意識が最も高いことが明らかになった。

⇒インフォームドコンセントを効果的に行うためには、患者・家族との円滑なコミュニケーションをとることが必要とされる。その為、学生の不安が最も高かった言語とも関連していると推測される。

・実習後には生活習慣と生活パターンが必要だと思うと答えた人が増加し、宗教についても必要だと思うと答えた人が増加した

⇒実習中に宗教について触れる機会や患者の日常生活について知る機会があったことが関係していると推測される。



これらは、実習での外国人患者や看護師からの患者の嗜好や1日の過ごし方などの話を伺うことができたという関わりを持てたことが関連していると推測される。このことから、言語や人種を超えて**1人の人間として関わり合うという意識**を持ち、言語に頼るだけでなく、非言語などを使用しながら**積極的に関わる**ことが重要であると考える。また、外国人患者の**生活背景や宗教を**意識した**看護**が今後必要であり、**外国人患者について知る機会を持つ**ことが重要であると考える。

1-2. 外国人患者の看護に必要なことについて TextMining Studio4.0.1を用いての分析

- ◎ 実習前後で自由記述による質問内容。
「外国人患者の看護をする際に必要なことは何だと考えますか」
実習前後とも全員が回答。
- ◎ 外国人患者の看護に必要なことについて本研究では、言葉ネットワークによる分析を行った。

◎ 外国人患者の受け持ち希望の理由: 総文章の基本情報

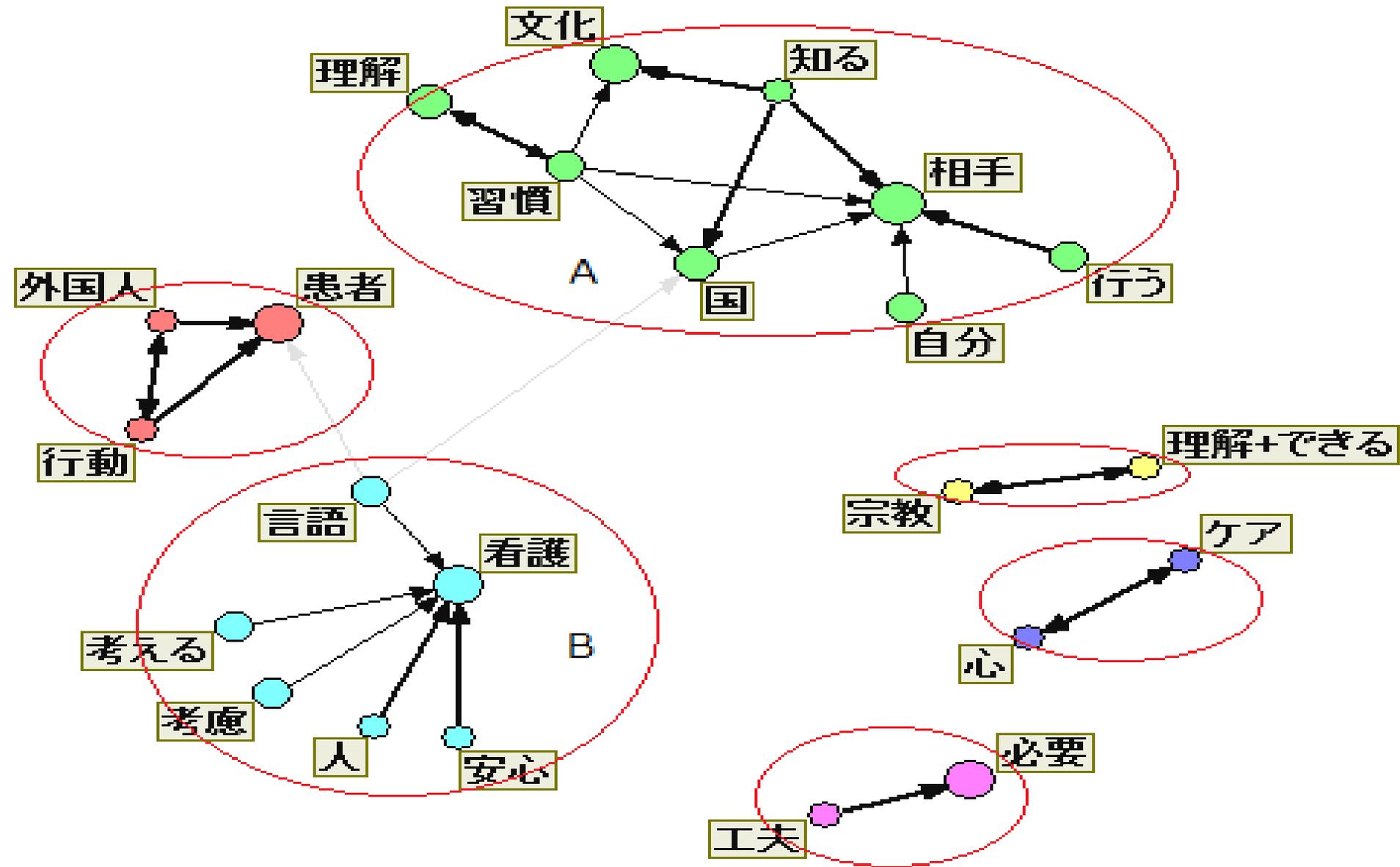
実習前

項目	値
総文数	46
平均行長(文字数)	24
平均文長	13.1
述べ単語数	224
単語種別数	135

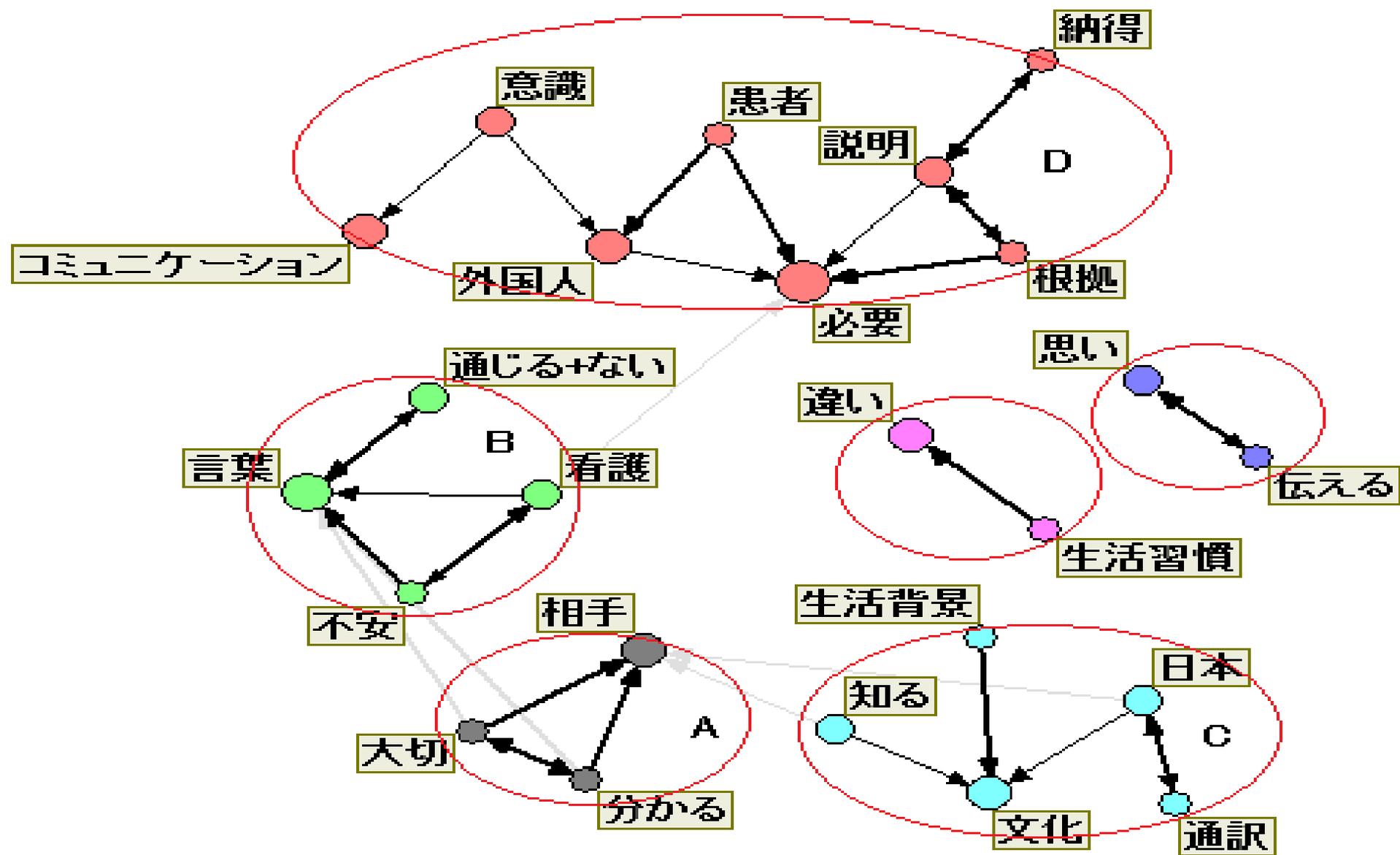
実習後

項目	値
総文数	45
平均行長(文字数)	28.2
平均文長	12.9
述べ単語数	213
単語種別数	142

4. 言葉ネットワークによる外国人患者の看護に必要なこと: 実習前



4. 言葉ネットワークによる外国人患者の看護に必要なこと: 実習後



◎結果

実習前後で共通

・グループA

「相手」が中心のもの→外国人患者について多方面から知ることについて表わしたものの。

・グループB

外国人患者に対する看護自体について表したものの。



実習後に

・グループC

グループAに関連して「文化」「生活」など書かれ、実習前と同様に外国人患者について理解することの大切さについて表したものの。

・グループD

「根拠」「説明」などが書かれ、外国人の看護をする際に必要なことについて具体的に表したものの。

◎ 考察

- ・外国人患者について多方面から知ること・理解することが必要であると考えていることが明らかになり、相手のことを知ることが重要であるということが示唆された。
- ・外国人患者に対する看護について、外国人の患者への看護として身体だけでなく、外国人の患者の抱えている不安を看護をするうえで配慮することの必要性について考えていることが明らかになった。これは、外国人患者の不安を軽減するなど、外国人患者へ安心できる看護を提供することが示唆されている。

IV 結論

今回の研究を通して、実習前後での外国人患者へ看護をすることに対する思いや、違いを比較して実習前と実習後で意識の差は明らかに違うことが分かった。

実習後には実習前と比較して外国人患者に対する看護について具体的に考えていた。

これらは看護師が実際に外国人患者へケアを行っている姿を見ることができたことにより**将来外国人患者へ看護をする際の自分自身のイメージが抱けたことによるもの**といえる。



現在の日本では国際看護学をカリキュラムに取り入れている大学は稀少であるが、今後授業とともに、外国人患者と関わることのできる実習の機会を取り入れることが重要である。

V. 引用文献

安達由希子, 小川美奈子, 佐竹紀子, 日詰有希子, 三河真弓, 牧本清子(2009), 外国人患者のケアに関

する公立病院の調査, 大阪大学看護学雑誌, 15(1), 19-31.

独立行政法人 日本学生支援機構(2012). 日本への留学生に関する情報, 2012年4月30日, 引用

http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html

藤原ゆかり(2008), Culturally congruent careの概念分析, 日本助産学会誌, 22(1), 7-16.

長谷川智子, 竹田千佐子, 月田佳寿美, 白川かおる(2002). 医療機関における在日外国人患者への看護

の現状, 福井医科大学研究雑誌, 3(1・2), 49-55.

法務省入国管理局(2010). 外国人の入国者及び登録者について, 2012年4月30日, 引用

<http://www.moj.go.jp/hakushotokei.html>

Nishikawa, M. , Kimura M.& Akutagawa, K. (2011).
Nursing Issues Relating to the Provision of Health
Care to Foreigners in Japan, the International
Council of Nurses, Valletta, Malta.

野中千春, 樋口まち子(2010). 在日外国人患者と看護師との
関係構築プロセスに関する研究,
Journal of International Health, 25(1), 21-31.

小野聡子, 山本八千代(2011). 看護者の異文化間能力に
関する文献検討, 川崎医療福祉学会誌, 20(2),
507-512.

数理システム(2012). Text Mining Studio, バージョン4.1,
東京, 20-25.

田村やよひ(2011). 国際看護学, メヂカルフレンド社, 東京,
65-67.